

(株)村田農園 代表取締役

村田正己さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「変わりゆくニーズを的確に捉えて俊敏に対応していくため、また、農業で一生涯というふうな自らの決意を込めて法人化した」と話すのは、久御山町北川顔(きたかわづら)地区の「(株)村田農園」代表取締役の村田正己さん(42)。

同地区は、京都市の南に位置し、隣接の藤和田地区とともに、根と実の付きがよい野菜苗として全国的に有名な、野菜苗「淀苗」の名産地だ。

同社では現在、6畝で生産する九条ねぎを中心に、ハウスでの「淀苗」の他、20品目以上の野菜や米をJAなどに販売する。

大阪でスポーツクラブのインストラクターをしていた村田さんは27歳の時、親からの「家の農業を継いでほしい」との思いに応え、農業を継ぐこと

を決意。経験はなかったが、持ち前の前向きな姿勢で親や先輩農家など周りの農家から技術や経営のノウハウを学び、2015年2月には同社を設立した。

設立後、同社で預かる農地が増え、現在は9畝を経営している。経営拡大に伴う雇用の確保に関しては、個人経営時から近所の人をパート雇用していた経験から、必要な雇員をスムーズに確保し、地域の雇用機会の提供にも貢献している。



▶主力のネギ畑を背にする村田さん

村田さんは「これからも法人として一層発展できるようにやっていきたい」と話し、経営力強化のためにさまざまな情報を収集し、柔軟でスピーディーな対応を心掛けている。また、JAの各種野菜生産者部会にも積極的に参加し、仲間づくりや情報共有を図っている。

高齢化などの理由で、今後は同社が預かる農地の増えることが予想される。「農地が一定以上増えると管理が行き届かなくなるなどの弊害がある。

「前向きな気持ちで前向きに出して新しいことに取り組むことがチャンスを生む。大きな産地と量の面で真っ向から勝負するより、京都ならではの『こだわりのもの』で勝負していきたい。農業を取り巻く環境は厳しいが、その時々のタイミングや流れに応じて的確に対応する。多くの人に自分のやっていることに共感を持ってもらえたらうれしい」と熱く語る。

農地が増えて販売品目や販売量が増えると、販売先をいかに確保するかも重要になってくる」と将来を見据え、「ミーティングや朝礼、月例会議などコミュニケーションの場での情報共有が必要になる。生産効率を上げるために従業員だけでなく、経営者のスキルアップも図らなければならない。やるべきことは多い」と対策を練る。

■法人所在地 久世郡久御山町北川顔馬嶋9の1。(電) 075(631)5620。

■法人概要 2015年2月設立。役員2人、社員4人、パートタイマー20人、農繁期アルバイト15人。経営面積9畝(九条ねぎ6畝、淀苗4畝20棟、水稲「ヒノヒカリ」1畝、その他)。農業機械 トラクター4台、トラクター用各種アタッチメント一式、ネギ移植機2台、ネギ調整機1台、ブームスプレーヤー1台。

企業的な経営めざす